入賞

福島県の未来へ繋ぐ

福島大学附属中学校１年
長谷川（はせがわ）　慶佑（けいすけ）

東日本大震災、原発事故から12年が経った今でも、時々、関連するニュースをテレビで耳にしたり、新聞で目にしたりすることがある。僕は0歳だったため、当時の記憶はない。しかし、ニュースで伝えられる様々な情報から、福島県の人々が古里の再生を強く願ってきたこと、様々な立場の人が復興の後押しをしてきたこと、風評被害の障壁が立ちはだかることが未だにあると知り、その度に東日本大震災、原発事故の影響の大きさを感じてきた。0歳だった僕でさえ、ニュースを見聞きする度に、悲しさや怒り、喜びを感じるのだから、直接的に影響を受けている人々はどういった思いなのだろうと思う。

僕が在籍する中学校では、地域課題に目を向け、科目を横断して何かを創造、実現していくSTEAM教育に積極的に取り組んでいる。入学後間もなく、僕は、学校内にビオトープを作る提案を、クラスや全校生へ向けて行った。理科の授業で、生物に関する内容を学ぶ中で、生き物が住みやすい環境を自分達の手で作りたいと考えたからだ。そして、先生方の支援もあり、休み時間や昼休みを使って、多くの生徒の手で、福島県の形を模したビオトープを作った。大学の先生のアドバイスを受け、校内に生息する植物を観察したり、移植する植物を選定したりした他、ビオトープ管理委員会も出来、様々な活動をしている。僕も委員会に入り、一時干からびてしまったビオトープをどうすれば良いか話し合う、観察した生き物の記録や水位変化の記録について検討、確認するなど、同じ委員会の1年生や先輩方と試行錯誤しながら活動中だ。同じようにビオトープがある学校や、なくても関心がある学校の人達と、管理方法や生き物の住みやすい環境作りについて話し合える場を設けたいとも考えている。

これらの活動を通し、初めて経験出来たこと、知ったことが多く、刺激を受けているが、他に、僕が新たに強く思ったことがある。それは、東日本大震災、原発事故で失われた福島県の自然を取り戻し、未来へ向けてさらに豊かなものにしたいということだ。ビオトープの活動から、校内に関係することだけでなく、失われた福島県の自然に関する問題を思い出すこともあった。そして、山々に囲まれ、少し車で移動すれば畑や田んぼが多く、虫や草花にすぐ触れることの出来る僕の身近な環境は、当たり前のことではないこと、何かがきっかけで失われる可能性もあり、大切に守ろうという思いと行動が必要だと感じた。これまで、自然環境を取り戻すための取り組みが 様々な形でなされてきたが、その取り組みをしてきた方々の思いを受け継ぎ、福島県の自然が豊かなものとなるように、少しでも出来ることをしていきたい。自分達も福島県を作っていくという思い、行動が未来へ繋がり、希望溢れる古里となると信じている。